

## 学習者の主体性に着目したI-E-Oモデルと評価指標に関する研究

相原, 総一郎

<https://hdl.handle.net/2324/2236321>

---

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (ライブラリーサイエンス), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏名	相原 総一郎			
論文名	学習者の主体性に着目した I-E-O モデルと評価指標に関する研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	廣川 佐千男
	副査	九州大学	教授	富浦 洋一
	副査	九州大学	准教授	多川 孝央
	副査	東京工業大学	教授	森 雅生

## 論文審査の結果の要旨

近年、高等教育機関における教育の質保証が求められている。教育の質保証は、教育活動や成果を定量的に示し、データに基づく改善サイクルを確立することにより実現される。そのような定量化の重要な要素の一つとして、個々の学生に対する学修行動調査が行われる。また、教育の質保証を確立する手段として説明責任の履行や情報公開があるが、学習行動調査を含む教育の定量的データはその基本的資料でもある。さらに、国際的な観点での教育の質保証の取り組みとして、各高等教育機関は国内だけでなく世界的視点での指標に基づく評価も求められるようになった。加えて、昨今では学生の主体性の涵養も求められている。そうした背景を踏まえて、学修行動調査の必要性が高まっているが、従来学修行動調査は行動と満足度の把握が目的であり、答えのない時代に求められる主体的に考える力、つまり、学習者の主体性の調査は含まれていない。実際に、学修行動調査の発祥地である米国における高等教育の一般的説明枠組として代表的なアスティンの I-E-O モデルや、それを発展させたテレンジーニとリーソンによる包括的 I-E-O モデルでも、学習者の主体性は明示されていない。

本論文は、学修行動調査のこれらの課題に対して、分析のための新たなモデルを提案し、そのモデルに基く調査のための具体的項目をまとめた評価指標を構築し、我が国の高等教育機関を対象とした調査で有用性を示したもので、以下の点で評価することができる。

まず第一に、I-E-O モデルの E（学習環境）を主体的学生関与の観点で構造化した新しいモデルを提案している。著者は、我が国の調査データを対象として相関と一因子性の観点で学習者の主体性の主要因子を求めた結果、米国の調査データで得られた 4 項目と一致していることを示している。提案モデルは、この 4 項目の指標によるものあり、国際的な共通の評価枠組みとして利用できることを意味し、従来なかった枠組の構築として評価できる。

第二に、I-E-O モデルの O（学習成果）における知識・技能を目的変数とする因子分析により、学習者の主体性が最も重要な要因であることを示している。これは、学習者の主体性を明示的に要素として持つ提案モデルが従来モデルより優れている事を意味し、新しいモデルの理論的優位性を示す結果として評価できる。

第三に、我が国の短期大学群について調査分析を行い、モデルと指標の有用性を示している。例えばある短期大学のある専攻は、教職員支援、大学満足度、授業満足度、アクティブラーニングが強味だが、学業の怠慢が弱味であり、平均的な評価値の主体的関与の改善により改革の可能性があることを提案モデルに基づく調査および分析により示している。理論的な枠組の提案にとどまらず、教育改善の可能性を示したもので、大学評価の具体的取組の方向を示す貢献として評価できる。

以上、本論文は、学修行動調査に関し、従来の I-E-O モデルにおける学習環境を主体的学生関与の観点で構造化した新たなモデルと具体的調査のための評価指標を提案し、その指標が国際的に共通な主要因子であり、従来のモデルより優れていることを統計的に実証し、我が国の短期大学群の調査への適用を通じ相互比較や改善点抽出に有用であることを示したもので、ライブラリーサイエンスにおける価値ある業績と判断した。

#### 最終試験

この論文について、論文調査委員会は、平成 31 年 2 月 22 日 13 時 00 分から九州大学伊都キャンパスイースト 1 号館 B324 教室において、相原総一郎氏及び論文査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。論文内容について、相原総一郎氏は論文調査委員と出席者の質問に的確にかつ明確な回答を行い、また、口頭又は筆答により行われた関連の授業科目等に関する調査についても、論文調査委員を満足させる回答を行ったことから、論文調査委員会は最終試験を合格と認定し、相原総一郎氏が博士（ライブラリーサイエンス）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。